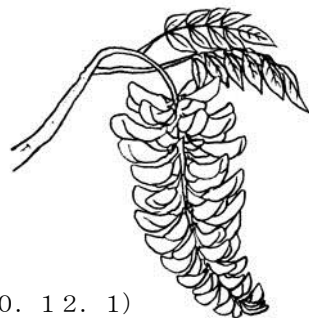


群馬医療福祉大学図書館報

昌賢だより

第17号 (2010. 12. 1)

発行：群馬医療福祉大学図書館
群馬医療福祉大学学生図書委員会



藤岡分館特集号



【特集】 藤岡分館



【 所蔵資料 】

蔵 書 数 : 5,000 冊
 雑誌タイトル数 : 30 誌 (和) / 15 誌 (洋)
 契約電子資料 : 2 種 (医中誌・メディカルライン)
 共用電子資料 : 1 種 (ブリタニカ・オンライン・ジャパン)

和雑誌			
1	インターナショナル ナーシング レビュー	16	ナーシングカレッジ
2	小児看護	17	臨牀看護
3	ナーシング・トゥデイ	18	訪問看護と介護
4	保健師ジャーナル	19	看護教育
5	看護	20	プチナース
6	看護学雑誌	21	リハビリナース
7	看護管理	22	小児看護
8	看護研究	23	精神看護
9	看護実践の科学	24	エマージェンシー・ケア
10	月刊ナーシング	25	HEART NURSING
11	公衆衛生	26	日本看護学会論文集
12	日本公衆衛生雑誌	27	がん看護
13	看護技術	28	看護学生
14	看護展望	29	PERINATAL CARE
15	エキスパートナース	30	コミュニティケア

洋雑誌	
1	Advances in Nursing Science
2	American Journal of Nursing
3	Clinical Nurse Specialist (CNS): The Journal for Advanced Nursing Practice
4	Nursing Research
5	International Nursing Review
6	Public Health Nursing
7	Rehabilitation Nursing
8	Research in Nursing & Health 【John Wiley & Sons Ltd.】
9	Research in Nursing & Health 【W.B. Saunders Co.】
10	Geriatric Nursing
11	Heart & Lung: Journal of Acute and Critical Care
12	Journal of Midwifery and Women's Health
13	Nursing Outlook
14	Nursing Times
15	Pediatric Nursing

----------*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*

— 先生からのお勧め本 —

藤岡キャンパスの先生方にお薦めの本や読書観等を教えていただきました。
この機会にお薦めの本を読んでみてはいかがでしょうか？

----------*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*

— 『食事で治す心の病 心・脳・栄養 — 新しい医学の潮流 —』 —

推薦者：清水敦彦先生

岩手大学名誉教授大沢博先生によって書かれた『食事
で治す心の病 心・脳・栄養 —新しい医学の潮流
—』（東京 第三文芸社 2007年）を推薦図書として
紹介します。

大沢博先生は『大学という教育システムの中で「心理
学」を専門としてきた私が、全国で起きた“校内暴
力”の根源は、食生活の崩れではないか、という根本
的な仮説を立て、自分なりに探求してきて30年たっ
た。最近では、心の健康と食生活との関係、だ
いぶ関心がもたれるようになった。学力と朝食、“
キレる”と食生活など、無関心とは思われな
くなった』として、現在世間で問題とされてい
るうつ、自殺、オーバードーズなど重大問題
はまだまだあるとしています。

大沢博先生は、主にアメリカやカナダなどの国
における精神医学の新しい流れの一つである「
分子整合精神医学」という理論の紹介（原書の
翻訳等）と普及に尽力されている先生です。『
脳が正常に働くには、ビタミンやミネラルが
安定して供給される必要があるがこれが欠乏
したり、バランスが崩れると、精神疾患の
症状がみられたり、反社会的行動が出現す
る、という考え方が「分子整合精神医学」の
基本である』として、6つの章から構成され
た内容の本を書かれています。第1章は「あ
れる社会と食生活」で、暴力化する人間、食
事崩壊の恐ろしさ、心を“凶悪”にする生
化学的要因、荒れた学校—“食育”で立ち直
る等と項を設け、校長研究大会や文科省「自
立支援教室」の方針などを例に述べておられ
ます。また学校給食改善に

よって効果を挙げている事例なども載せてい
ます。第2章は「低血糖という病」で、暴力
と低血糖、世界初の低血糖の論文、医師の
体験と臨床研究、現代病—低血糖症として
おり、第3章では「低血糖症の人びと」と
して、不登校と低血糖、学生・教師のレポ
ートからADHD（注意欠陥多忙性障害）と
低血糖症と低血糖症による病気の事例を
挙げて説明しています。さらに第4章では
具体的な病名「低血糖症と統合失調症」を、
第5章では「アルツハイマー病と低血糖」
として、「認知症」の老人調査、医学者が
食生活に注目した、菓子が大好きだった
患者の事例を載せて解説し、最終章では
「食生活の立て直し」として、米離れで
菓子に傾いた食生活、砂糖過剰摂取の
問題などについて述べられ、最終的には
先駆的な医師、それに患者・家族から
学んで、効果的な治療・援助を開始す
る精神科医が現れてくることを期待して
いるとしています。

要は「心の健康と食生活は深く関わり合
っている。砂糖のとりすぎ、米ばなれへ
の警鐘！」について具体的に例を挙げて
述べた本と言えます。そして第三のキ
ーワードを「低血糖症」とすると、現
代のさまざまな病理が理解できるとし
ているのです。

大沢博先生は群馬県渋川市にお住まい
の先生で、私と一緒にカウンセリング研
究会の仕事をしておられ、専門は「
教育心理学」の優しい温厚な先生です。
そして疑問が生じたら質問をしてみ
て下さい。きっと喜ばれると思いま
す。



— 『ピロードのうさぎ』 —

推薦者：櫻井美和先生

この本に出会ったのは3年前。ある学会の帰りに立ち寄った絵本の美術館でした。表紙に描かれた緑色の目をしたうさぎがとてもかわいらしく、気づくと手を伸ばしていました。

ぼうやのもとにプレゼントされてやってきた“ピロードのうさぎ”はある晩、仲間のウマのオモチャから、「子どもとほんものの友達になったおもちゃに起こる魔法」の話聞きます。ぼうやとピロードのうさぎは、とても仲よし。寝るときも、遊ぶときも一緒です。一やがて時間が過ぎ、ピロードのうさぎはよごれてボロボロになり、ぼうやが病気になった時に捨てられることになるのです。「あんなに楽しかったのに…」。

ロードのうさぎの涙が地面に落ちた時、美しい妖精が現れて「魔法」が起こったのです。

疲れていた私には、少し悲しいけれど優しく温かな気持ちにさせてくれる絵本でした。子どもには、ものを大切にする気持ち、動物や人を思いやる気持ちを育んでくれる絵本です。大人には、「ほんものってどういうことなんだろう」と考えさせてくれる絵本です。そして、専門職性をもった職業に就こうとしている学生さんたちには、「ほんもの～（看護師、社会福祉士、教師など）になるってどういうことなんだろう」と考えさせてくれる絵本です。



— 『語りかける身体 — 看護ケアの現象学—』 —

推薦者：中村貴子先生

遷延性または慢性意識障害、いわゆる植物状態と呼ばれる患者さんと看護師との生きられた世界の物語である。意識障害が長期間続く患者さんについて、医師は何を言ってもわからない状態だと説明するが、毎日看護ケアをしている看護師はそう考えていないのである。声を出して自らの意思を伝えることが困難な患者さんと24時間触れ合っていると、彼らの反応から語られない言葉の背後にある意思が伝わってくる。言葉ではなく身体で語りかけているのである。全身の筋緊張の程度やわずかな表情の変化など、さまざまなサインを看護師は受け止めながら看護ケアを行っている。そこには主体的な相互関係が存在するのである。

自らも同じような経験をもつ著者の西村さんが、植物状態患者の専門病院で約6ヶ月にわたって行ったフィールドワークから優れた看護実践を伝えてくれる。私は脳死状態の患者さんから突きつけられた意思を感じた経験があり、実証が難しい半信半疑だった現象を確信に向かわせてくれた。

臨床現場には優れた看護実践が埋もれている。その一つひとつの事実を掘り起こし看護の“実践知”を明らかにすることで、看護師でなければできないことを世に伝える1冊である。





— 本 と 私 —

藤岡キャンパスの学生の皆さんにお薦めの本や読書観等を教えていただきました。
この機会にお薦めの本を読んでみてはいかがでしょうか？



— 私にとっての「本」 —

看護学部：金井里恵

現代の日本では幼い頃から本をたくさん読むべきだ、と盛んに唱えられている。本を読むとその時期の社会状況、様々な用語や一般常識などを知ることが可能であるからだと思う。

確かにこのようなことを知ることで、様々な考え方をすることができ、自身の世界観が広がっていくだろう。実際に私も一冊の本を読むだけで、ひとつのことに対する感情の表現の仕方や捉え方のレパートリーが、確実に増えていることを読んだ後の生活のふとし

た瞬間から実感することがある。

人が十人十色であると言われるように本も十人十色だと思う。もちろん読む人間によって解釈の仕方は異なるのだが、それを聞くのが面白い。同じ本なのに人によって180度異なる捉え方があるため、その意見を頭においた上で同じ本を読み返す。するとまた違った世界が出来上がる。現実ではそうはいかない。本は「変化」のきく世界である。

だから本は面白い。



— 『 No.6 』 —

看護学部：土屋咲貴

この本と出会ったのは高校1年の時でした。この本を書いた作家さんが好きだからこの本を手にとったというのがこの本を読むきっかけとなりました。

近未来SF小説で2013年、理想都市『NO.6』に住む紫苑は、9月7日が12回目の誕生日で、それと同時に彼の運命を変える日でもあり、その日、ふとしたことから、『矯正施設』から抜け出してきた謎の少年、ネズミと出会います。彼を介抱してあげた紫苑でしたが、それが治安局にばれてしまい、NO.6の高級住宅街『クロノ

ス』から『ロスタウン』へと追いやられてしまいました。それから4年、謎の事件をきっかけに彼は様々な事件に巻き込まれ、いろいろな人々と出会いそして、理想都市が成り立っている裏側にある現実・『理想都市NO.6』の隠された本質と意図を知っていく物語となっています。

1ページ目の1行目で物語に引き込まれるほどリアルで迫力のある物語です。勉強の息抜きに是非読んでみて下さい。





— 『約束』 —

看護学部：柳澤里奈

この本は「池袋ウエストゲートパーク」、最近では「美丘」の作家として知られる有名作家の石田衣良さんが、池田小学校事件の衝撃から一気に呵成に書き上げた表題作はじめ、ささやかで力強い回復・再生のものがたりを描いた必涙の短編集です。どの話も心に響くものがありますが、私は中でもお勧めしたいのが表題作である「約束」です。突然の事件で親友を失った男の子が自分が死んだらよかったのに、と悩み苦しみ、何度も自殺を図ろうとします。しかしそんな彼に起き

たある出来事。それをきっかけに冴えなくてもかまわない、最後の一滴が枯れるまで一緒に生きていこうという大好きな親友との「約束」を胸に再び歩き出す。そんなお話です。読み終わった後、涙が止まりませんでした。でも不思議と心が軽く、温かくなります。人生は決して平坦な道のりではなくて、時にはもう立ち直れないんじゃないかと思う出来事もある。でもこの本を読んで、いつでもやり直せる。いつでもスタートできる。そんな気持ちになりました。



— 『明日もまた生きていこう』 —

看護学部：鯨井志保

私が紹介する本は、オリンピックでの活躍を期待されていたバレーボール選手である横山友美佳さんが18歳のときに癌の宣告をされ、そのとき、病床で綴っていた感動の全手記です。

この本で横山さんは、歩くこと、話すこと、見ること、聞こえること、喜ぶこと、悲しむこと、そして生きること。当然のようにできている人間は何とも思わないけれど、これらはすべて当たり前のことなんかではなく、バレーボールをやっていたころはよく「休みが欲しい」などと思っていたが、突然病気になってバレーボールができなくなってから、当たり前バレーボールをしていたことが、それだけでどんなに素晴らしいことかに気付いたと書いています。

強く生きること、どんなことがあっても絶対にあきらめないということを伝えてくれる1冊だと思います。今度ドラマでもやるのでよかったら見てみてください。





— 『青空のむこう』 —

看護学部：荻原夏美

私が『青空のむこう』という本に出会ったのは中学3年生の時でした。この本に出会うまで私は、私の明日があると思っていました。今を大切に生きるということを知らなかったのです。この本は、私たちに生きていく上で大切なことを3つ、教えてください。

1つは、私たちには家族や友達など沢山の人が支えてくれているということです。

2つ目は、今を大切に生きていくことの大切さです。

失った時間を取り戻すことは出来ないのです。

3つ目は、夢を見失わないということです。今日という1日を一生懸命生きるということは、未来を築き上げていくことなのです。

どうすればいいのかわからない時、あなたならどうしますか。そんな時、本を開いてみると、案外、答えが見つかることもあると思います。



— ブック ブック ブック —

看護学部：小林信之

私はもともと、漫画は大好きでしたが、小説は大嫌いでした。そんな私が小説に興味を持ち始めたのは、小学校6年生の頃でした。

なぜ、私が小説に興味を持ったかという、6年生の時の教科書にたまたま『バースデイ・ガール』という小説が載っていて、先生がそれを読むという授業を行ったのがきっかけでした。その本の内容は、「自分の誕生日の日にもアルバイトをしている女性が、ひよんなことから、初めてその職場の一度も顔を見たことのないオーナーに夕食を持っていく、という昔の出来事をその女性が友達に話す。」という内容です。その本を読んだあと、私は何か不思議な感じに捉われました。もともと、その本の内容が不思議な感じに仕上がっていたからかもしれませんが、そのとき、私は確実に小説の渦に飲み込まれたわけです。

そして、中学3年生の時に、その本の作者が、あの『ノルウェイの森』や『スプートニクの恋人』や『海

辺のカフカ』などの著書で有名な村上春樹さんだったことに気付いたのです。そして私は、村上春樹さん著書に興味を持ち、小説を読み始めたのです。要するに、村上春樹さんの「バースデイ・ガール」という著書を、もし私が読んでいなければ、小説に興味を持っていなかったかもしれないということです。

私はその後、小説などに影響されたのかは良く分かりませんが、詞や演劇台本を書くようになりました。それらを書く過程で、小説や漫画などの本はものすごく役に立つのです。

それらを読むことによって、自分の中の言葉の数や文章表現が増えるからです。そしてそれを詞や演劇台本に応用する。まさに、一石二鳥です。自分とは違う世界観を体感できるのが本であると私は感じるので、暇があって興味がある本を見つけたら、読んでみましょう。新しいトビラが開くかもしれませんので。





— 『余命』 —

看護学部：山形エリカ

今回、私が紹介する本は谷村志穂さんの「余命」という本です。

主人公の外科医である滴は、妊娠と同時に乳癌が再発してしまいます。滴は、自分の延命のために乳癌の治療を行うのか、治療をせずに新しい命を産み落とすのか、究極の決断を迫られます。

滴は、現役の外科医なので病気について知りつくしています。そこで、自分の余命を冷静に診断したり、エコーでおなかの赤ちゃんと一緒に自分の乳癌も診察する場面がとても切なく印象に残っています。

私はこの本を読んで、夫婦・家族間での愛や絆を学ぶことが出来ました。そして、命の重みや儚さを感じることが出来ました。

もし皆さんが滴のようになったら、どんな選択をしますか？主人公の選択に賛否両論はあるかもしれませんが、自分の置かれている立場や、経験の違いによっても選択は変わってくると思います。しかし私は彼女の選択に納得しました。皆さんにも是非読んでおいてほしい一冊です。



— 『人間失格』 —

看護学部：徳武沙織

この話はあの有名な太宰治の代表作です。太宰治にとっては最後の作品です。

「恥の多い生涯を送って来ました。」という告白から始まる話ですが、この主人公は幼い頃から自分とは違う、人と関わる時は嘘の自分を演じて接してゆき、わざと馬鹿なことを行い大人たちや同級生の前で、おちゃめな子、子供らしい子供を演じ誰にも本当の自分を見せること無く育っていきます。そしてこの主人公は人間への恐怖を紛らわす為に酒やタバコに溺れ、そんな自分をさらに駄目な人間と感じる一方、人妻との不倫を繰り返し、ついには心中未遂事件を起こしますが、自分だけが助かります。これを機に自分探しのた

め家出をするが、酒、タバコ、薬物、裏切り、自殺未遂・・・そんな自分に耐え切れず、自ら家族に取り合い病院へ連れて行かれます。行き先は自分はサナトリウムだと思っていたが、脳病院へ入院させられ、自分は他人より狂人としてレッテルを貼られたことを自覚し、もはや自分は「人間失格」だと確信してしまうという話です。とても内容が深く、1回読んだだけでは理解するのがとても難しいです。人間の心の奥深くに潜んでいる寂しさや孤独感がすごく伝わってきます。また、2回3回・・・と読むごとにこの主人公の気持ちがわかってくる様な気がします。ぜひ1度読んでみてください



図書館報第17号をお届けします。

今年は藤岡キャンパスに看護学部が開学したことに伴い、新たに藤岡分館も開館となりました。開館準備のボランティアでお手伝いいただいた学生の皆さん、本当に有難うございました。今後はより良い図書館サービスを目指して、本館と分館が協力して皆様のサポートをしていきたいと思っております。

最後に図書館報の発行にあたり、お忙しい中原稿の執筆をしていただいた方々に心より感謝申し上げます。

(図書館)

